

平成 24 年度

病害虫発生予報第 3 号

平成 24 年 6 月 21 日

三重県病害虫防除所

515-2316 三重県松阪市嬉野川北町 530

TEL 0598-42-6365 Fax 0598-42-7568

ホームページ<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/boiyosyo/>

目次

	ページ
1. 向こう 1 か月の予報と対策	1
2. 作物別の状況	2
3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠	8
4. 予察項目の見方	15
5. 今月のトピックス（ブドウべと病について）	16
6. 気象のデータ	17
7. おしらせ	19

1. 向こう 1 か月の予報と対策

1) 作物

イネでは、葉いもちの発生量はやや多、穂いもちの発生時期は平年並、発生量はやや多と予想されます。早期発見と早期防除を心がけ、今後の気象状況に注意してください。白葉枯病の発生量はやや多と予想されます。常発地では予防散布をしてください。斑点米カメムシ類、セジロウンカの発生量は平年並と予想されます。紋枯病の発生時期は平年並、発生量はやや少、イネクロカメムシ、ツマグロヨコバイの発生量はやや少と予想されます。

2) 果樹

カンキツでは、そうか病、黒点病、かいよう病（中晩柑）、ミカンハダニの発生量はやや多と予想されます。そうか病は常発園や幼木園等での発生に注意してください。黒点病は薬剤防除とともに枯枝の除去に努めてください。かいよう病（中晩柑）は雨の合間に薬剤散布してください。ミカンハダニは葉裏にもかかるように薬剤散布してください。かいよう病（温州みかん）、チャノキイロアザミウマの発生量は平年並と予想されます。

ナシでは、黒星病の発生量はやや多と予想されます。発病した葉や果実は取り除いて圃場外で適切に処分してください。ハダニ類の発生量は平年

並と予想されます。

ブドウでは、べと病の発生量は平年並と予想されます。

果樹共通では、果樹カメムシ類の発生量は多と予想されます（注意報第 1 号、5 月 30 日発表）。圃場への飛来を確認したら防除を実施してください。

3) 茶

チャでは、炭疽病、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、チャノコカクモンハマキの発生量はやや多と予想されます。炭疽病は新芽展開期に防除してください。チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマは萌芽期～開葉初期に防除してください。チャノコカクモンハマキは若齢幼虫を対象に防除してください。クワシロカイガラムシの発生時期および発生量は平年並と予想されます。カンザワハダニ、チャノホソガの発生量はやや少と予想されます。

4) 野菜

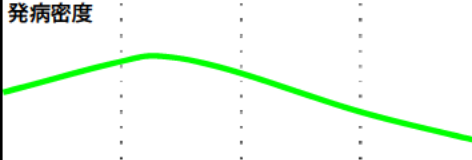
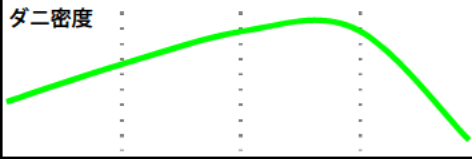
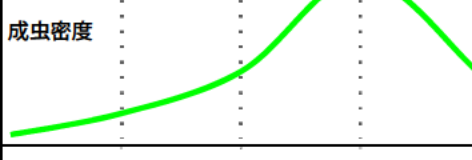
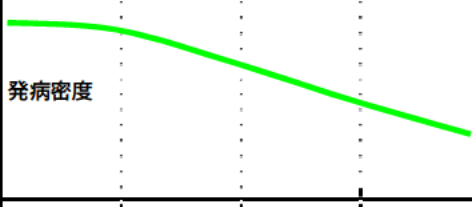
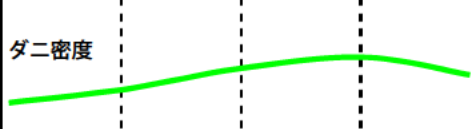
イチゴでは、炭疽病の発生量はやや多と予想されます。薬剤による予防防除と発病株の除去を徹底してください。うどんこ病、ハダニ類の発生量は平年並と予想されます。

ネギでは、ネギコガの発生量は平年並と予想されます。

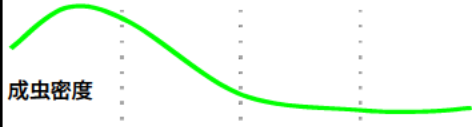
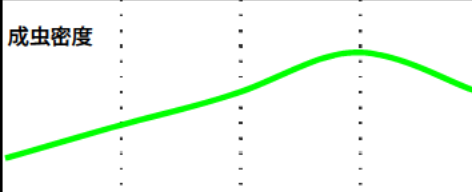
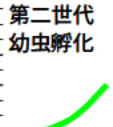
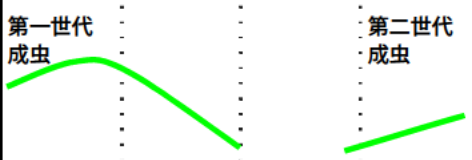
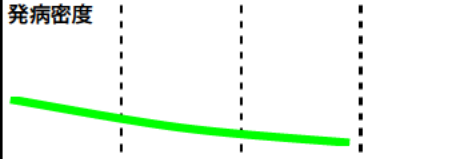
2. 作物別の状況

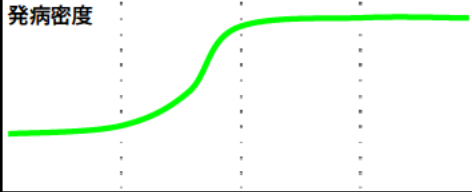


作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
							下旬	上旬	中旬	
イネ	葉いもち	—	やや多	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 病害虫防除技術情報第7号（6月15日発表）。 2) 圃場を見回り、早期発見、早期防除に努めましょう。 3) 補植用置き苗は発生源となるので、速やかに取り除いてください。 4) いもち病発生予測支援システム（プラスタム）において、感染好適条件が7～10日ごとに繰り返し現れると、流行の恐れがあります。 5) プラスタムの最新情報は病害虫防除所ホームページで随時更新しています。
	穂いもち	平年並	やや多	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 葉いもちが上位葉に多く発生すると、穂いもちへ移行しやすくなります。圃場および周辺圃場での葉いもちの発生状況に注意してください。 2) 薬剤散布は穂ばらみ期から穂揃い期に予防的に行ってください。
	紋枯病	平年並	やや少	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 幼穂形成期頃（穂肥時期）から発生が目立つようになります。 2) 水面に近い茎から茎へ感染します。薬剤散布によって病斑の上位葉への進展を阻止してください。
	白葉枯病	—	やや多	小	低					<ol style="list-style-type: none"> 1) 深水、冠水、台風によって感染や発病が助長されます。 2) 常発地では台風直後に薬剤散布をしましょう。予防的な薬剤散布は効果が高いです。 3) 「みえのゆめ」は弱い品種なので注意してください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
イネ	斑点米カメムシ類	—	平年並	小	普通		<ul style="list-style-type: none"> 1) 圃場周辺のイネ科雑草で発生、増加します。除草に努め、密度を低く抑えてください。 2) 本田への侵入を防ぐため、除草作業は出穂 10 日前までに実施してください。 3) 本田粒剤で防除する場合は出穂期に散布しましょう。 			
	イネクロカメムシ	—	やや少	小	普通		<ul style="list-style-type: none"> 1) 常発地で薬剤散布する場合は、越冬成虫の発生量がピークとなる 6 月下旬に実施してください。 2) 日中は株元に潜んでいるので、夕方や曇天の日に薬剤散布を行うと効果的です。 			
	ツマグロヨコバイ	—	やや少	中	低		<ul style="list-style-type: none"> 1) 当面、防除が必要な密度には達しないと思われます。 			
	セジロウンカ	—	平年並	小	低		<ul style="list-style-type: none"> 1) 例年、被害の発生はごく局所的であるため、多飛来が認められた場合は、病害虫防除技術情報で臨時発表します。 			
カンキツ	そうか病	—	やや多	小	普通		<ul style="list-style-type: none"> 1) 常発園、幼木園、高接ぎ更新園の温州みかんでは、発生に注意してください。 2) 果実への感染は梅雨末期頃までといわれています。 			
	黒点病	—	やや多	中	普通		<ul style="list-style-type: none"> 1) 枯枝が伝染源です。梅雨時期の枯枝発生に注意し、樹冠内や圃場内の枯枝を除去してください。 2) 薬剤散布は前回の散布後に積算降水量が 200~300mm に達した時を目安に実施してください。 			

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量		要防除圃場率 平年比	発生消長の一例				防除の注意事項
			平年比	程度		6月	7月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
カンキツ	かいよう病	—	温州 平年並 中晩柑 やや多	温州 小 中晩柑 中	温州 低 中晩柑 普通	発生密度 				<ol style="list-style-type: none"> 1) 降雨があると急速に感染が広がるので、雨の合間に防除してください。 2) 発病枝葉、果実は、見つけ次第剪除し処分してください。 3) 幼木や高接樹ではミカンハモグリガの被害部に発病しやすいので、ミカンハモグリガの防除を実施してください。 4) 中晩柑類では、梅雨期頃から10月中下旬頃まで、果実への感染が起こります。
	ミカンハダニ	—	やや多	大	高	ダニ密度 				<ol style="list-style-type: none"> 1) 1葉当りの雌成虫発生数が0.5～1.0頭程度を目安に防除してください。 2) 薬剤は葉裏にもかかるように散布してください。 3) 同一系統薬剤の連用は避けてください。
	チャノキイロアザミウマ	—	平年並	中	普通	成虫密度 				<ol style="list-style-type: none"> 1) 寄生果率10%を目安に防除してください。 2) 7月になり果実肥大が進むと果頂部で加害します。 3) 圃場周辺のイヌマキ・サンゴジュ・チャ等が発生源となります。
ナシ	黒星病	—	やや多	中	普通	発生密度 				<ol style="list-style-type: none"> 1) 病害虫防除技術情報第6号（6月14日発表）。 2) 発病果及び発病葉は除去して、圃場外に持ち出し処分してください。 3) 発病が確認される圃場では、すみやかに防除を計画してください。 4) 薬剤散布を実施するときは薬剤をていねいに散布し、同一系統薬剤の連用を避けてください。
	ハダニ類	—	平年並	中	普通	ダニ密度 				<ol style="list-style-type: none"> 1) 1葉当り寄生数が1～2頭で防除を実施してください。 2) 7～8月に密度が高くなります。徒長枝での発生にも注意してください。 3) 同一系統薬剤の連用は避けてください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
ブドウ	べと病	—	平年並	小	普通	発病密度		<ol style="list-style-type: none"> 1) 降雨が連続すると、病徴が急速に進展するので、葉裏に病斑を認めたら直ちに薬剤を散布してください。 2) 降雨の合間に防除を計画してください。 3) 被害葉及び被害落葉は感染源となるので圃場外に持ち出して処分してください。 4) 同一系統薬剤の連用を避けてください。 		
果樹共通	カメムシ類	—	多	大	高		<ol style="list-style-type: none"> 1) 注意報第1号(5月30日発表)。 2) 局所的に密度が高まる場合があります。圃場をよく観察し、カンキツ、ナシ(無袋栽培)、カキでは、まとまった飛来を確認したら、防除を実施してください。 3) 中山間地や以前多発したことがある地域では、注意が必要です。 4) 地域で発生量が多い場合は、一斉防除を検討してください。 			
チャ	炭疽病	—	やや多	中	普通		<ol style="list-style-type: none"> 1) 新葉の1葉期に感染します。降雨と25℃前後の適温条件で発生が多くなります。 2) 旧葉の病斑が感染源となります。病斑葉が多い圃場では、新芽展開期に防除してください。 3) 二番茶後の整剪枝で病斑葉を落とすと、発生軽減効果があります。 4) 同一系統の薬剤、特にEBI剤は耐性菌が出現しやすいので連用は避けましょう。 			
	カンザワハダニ	—	やや少	小	普通	ダニ密度		<ol style="list-style-type: none"> 1) 一番茶後に気温が高くなると多発するので注意しましょう。 2) 葉裏に薬液が十分付着するように丁寧に散布しましょう。 3) 天敵への影響の小さい薬剤を選択し、同一系統の薬剤の連用は抵抗性が発達するので避けましょう。 		
	チャノホソガ	—	やや少	小	普通	成虫密度		<ol style="list-style-type: none"> 1) 新芽がないと産卵しませんので、飛来状況を見て防除しましょう。 2) 防除所ホームページにフェロモントラップ誘殺状況が掲載されているので、防除の参考にしてください。 		

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
チャ	チャノミドリヒメヨコバイ	—	やや多	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 二番茶以降、晴天が続くと発生が多くなります。 2) 多発圃場では開葉初期に防除しましょう。
	チャノキイロアザミウマ	—	やや多	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 第2世代の成虫発生最盛期は6月第4～第5半旬、第3世代は7月第2～第3半旬と予想されます。 2) 晴天が続くと発生が多くなります。 3) 新芽の伸長とともに発生が増加し、特に萌芽期に加害されると被害が大きくなります。このため、萌芽～開葉初期の防除が重要です。
	クワシロカイガラムシ	平年並	平年並	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 有効積算温度による発生消長予測式では、第2世代の幼虫孵化最盛期は、四日市7月19日、亀山7月18日、粥見7月20日、小俣7月15日(4地点平均7月18日)と予想されます。この約3日後が防除適期です。 2) 土着天敵に影響が小さい薬剤を選びましょう。
	チャノコカクモンハマキ	—	やや多	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 幼虫は新葉を好み、2～3枚綴った中で食害します。 2) 若齢幼虫を対象とした薬剤防除が効果的です。成虫発生最盛期後7～15日が防除適期となります。 3) 防除所ホームページにフェロモントラップ誘殺状況を掲載しているので、参考にしてください。
イチゴ	うどんこ病	—	平年並	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 育苗期の防除を徹底してください。 2) 薬剤防除は予防散布に努めます。葉裏から発生しやすいので、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布してください。 3) 発病を認めたときは、集中的に散布して感染拡大を防いでください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項	
			平年比	程度		平年比	7月				
							6月	下旬	中旬		下旬
イチゴ	炭疽病	—	やや多	中	普通	発病密度					<ol style="list-style-type: none"> 1) 病原菌は高温多湿条件を好み、梅雨時期以降に発生が多くなるため、十分な注意が必要です。 2) 病原菌（孢子）を含む水の跳ね返りで感染が拡大します。頭上灌水は避け、株を濡らさないようにしてください。 3) 発病株は感染源となるため、周辺株を含めて早期に除去し、処分してください。 4) 薬剤防除は、薬液が株元まで十分かかるよう丁寧に散布してください。特に葉かき作業後や降雨などの前後は重点的に行ってください。
	ハダニ類	—	平年並	小	普通	雌ダニ密度					<ol style="list-style-type: none"> 1) 作物残渣から歩行によって逃避します。葉かき後の残渣は圃場外に持ち出し、速やかに処分してください。 2) 多発すると防除が困難になります。早期発見に努め、発生初期に防除を行ってください。また、散布は葉裏を中心に丁寧にしてください。 3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤や同一系統薬剤の連用は避けてください。
ネギ	ネギコガ	—	平年並	小	普通	成虫密度					<ol style="list-style-type: none"> 1) 春から秋にかけて4～5回発生します。 2) 幼虫は葉の内部に潜り、表皮を残して食害します。潜入防止のため、発生初期から防除を行うことが重要です。

3. 発生時期・発生量（平年比）の予察根拠

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	葉いもち	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報（6月15日発表）によると、気温は低くなく、降水量は少ない予想（+）</p> <p>2) プラストム（6月17日現在）によると、感染好適条件は南伊勢で6月10日と17日に繰り返し出現、熊野新鹿で6月12日、桑名・四日市・亀山・小俣で6月13日に出現（+）</p> <p>3) 巡回調査圃場（6月第2週）では、置き苗での発生を確認し、発生圃場率1.3%（平年0.7%）と多(+)、本田における発生圃場率0%（平年0.08%）と平年並に少ない傾向(±)。置き苗での発生があった圃場では6月15日に本田での発生を確認(+）（+）</p> <p>4) 一般圃場では、本田での発生は無いが、5月の育苗期間中に苗いもちが発生（+）</p> <p>考察：巡回調査結果、プラスタムによる判定結果および今後の気象条件を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	穂いもち	平年並	やや多	<p>要因</p> <p>1) 水稻生育予測システム（津、4月25日移植コシヒカリ、6月17日現在）によると、予想出穂期は7月19日頃（平年7月20日頃）と、平年並の予想（発生時期±）</p> <p>2) 一般圃場では、4月下旬移植では生育進度、生育状況ともに平年並、5月移植では強風による植え傷みによりやや遅い生育（発生時期±、発生量±）</p> <p>3) 葉いもち発生量はやや多の予想（+）</p> <p>考察：水稻の生育状況を考慮して、予想発生時期は平年並、葉いもちの予想発生量を考慮して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	紋枯病	平年並	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報（6月15日発表）によると、気温は低い予想（+）</p> <p>2) 巡回調査圃場（昨年8月）では、発病株率7.1%（平年12.3%）と少（-）</p> <p>3) 一般圃場では、生育進度は4月下旬移植では平年並、5月移植では強風による植え傷みによりやや遅（発生時期±）</p> <p>考察：水稻の生育状況を考慮して、予想発生時期は平年並、巡回調査結果を重視して感染源となる越冬菌核量は少ないと予想され、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	白葉枯病	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 6月19日を中心に、台風の影響により強い風を伴う降雨が全県的に発生（+）</p> <p>考察：台風の通過により感染の機会があったと考えられるため、予想発生量はやや多と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	斑点米カメムシ類	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（松阪市・4月第1半旬～6月第3半旬）では、誘殺数はアカスジカスミカメ0頭（平年8.1頭）と少、アカヒゲホソミドリカスミカメ1頭（平年20.5頭）と少（-）</p> <p>2) 巡回調査圃場（6月第2週）では、畦畔イネ科雑草すくい取りによる発生地点率および成幼虫数は、中型種ではホソハリカメムシで9.4%（平年10.5%）とやや少、0.1頭（平年0.2頭）と少、クモヘリカメムシで0%（平年0.2%）と平年並に少、0頭（平年0.009頭）と平年並に少、シラホシカメムシ類で6.9%（平年6.2%）と平年並、0.2頭（平年0.09頭）とやや多(±)。微小種ではアカスジカスミカメで43.8%（平年20.4%）と多、2.2頭（平年1.0頭）と多(+)（±）</p> <p>考察：巡回調査結果を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	イネクロカメムシ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（松阪市・4月第1半旬～6月第3半旬）では、誘殺数は水田位置0頭（平年6.9頭）と少、畑位置97頭（平年137.4頭）と少（-）</p> <p>2) 県予察圃（松阪市・6月18日）では、成虫および被害株の発生を確認（+）</p> <p>3) 巡回調査圃場（6月第2週）では、発生圃場率0.9%（平年5.3%）と少、25株当たり成虫数0.01頭（8年平均0.06頭）と少ない傾向（-）</p> <p>4) 一般圃場では、無～平年並（概して少）（-）</p> <p>考察：巡回調査結果、一般圃場の発生量は少ない状況ですが、県予察圃の発生状況から越冬成虫の本田への侵入が確認されたことを考慮して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	ツマグロヨコバイ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（5月第1半旬～6月第3半旬）では、誘殺数は松阪市0頭（平年1.4頭）、伊賀市0頭（平年0頭）、紀北町0頭（平年0.1頭）、御浜町0頭（平年0.3頭）と、概して平年並に少ない傾向（±）</p> <p>2) 巡回調査圃場（6月第2週）では、払い落とし成虫数0.006頭（平年0.07頭）と少、同・幼虫数0.1頭（平年0.2頭）とやや少（-）</p> <p>3) 一般圃場では、無～平年並（概して少）（±）</p> <p>考察：巡回調査結果を重視して、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	セジロウカ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯（県内4か所）では、6月16日現在未飛来（松阪市・平年初飛来7月5日）（±）</p> <p>2) 巡回調査圃場（6月第2週）では、払い落とし成虫数0.009頭（平年0.003頭）と平年並（±）</p> <p>3) ウンカ飛来状況（JPP-NET）によると、九州では6月上旬までに多飛来は無（-）</p> <p>4) 一般圃場では、無～平年並（概して少）（±）</p> <p>考察：現在の飛来状況から当面は密度が大きく上昇することはないと予想されるため、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	そうか病	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、気温は低くなく、降水量は少くない予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬)では、発病葉率 90.0%(平年 54.4%)と多、発病果率 84.2%(平年 47.5%)と多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、春葉発病度は 0.2(平年 0.1)とやや多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並～やや多(概してやや多) (+)</p> <p>考察: 現状の発生量はやや多と思われ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
	黒点病	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、降水量は少くない予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬)では、果実発病度 8.1(平年 5.2)と多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、春葉発病度 3.2(平年 0.4)と多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>5) 着果量にバラツキがあるが樹勢は普通、感染源となる枯枝は平年並 (±)</p> <p>考察: 現状の発生量はやや多と思われ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
	かいよう病	-	温州 平年並 中晩柑 やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、気温は低くなく、降水量は少くない予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃(新甘夏)における果実での初発は、6月15日(平年6月8日)と遅 (-)</p> <p>3) 県予察圃(6月中旬、新甘夏)では、新葉発病率 0.7%(平年 10.0%)、発病果率 0.8%(平年 1.5%)といずれも少 (-)</p> <p>4) 巡回調査圃場(6月第2週)では、新葉発病率は温州みかんでは 1.1%(平年 0.2%)と多、中晩柑では 8.7%(平年 3.6%)と多 (+)</p> <p>5) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察: 温州みかんでは、発生が見られる圃場もありますが、現状の発生量は平年並と思われ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。中晩柑類では、現状の発生量はやや多と思われ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
	ミカンハダニ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、気温は低くなく(+)、降水量は少くない(-)予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬)では、100葉当り寄生頭数は無防除区 27.8頭(平年 20.0頭)と多(+)、慣行防除区 0.0頭(平年 4.9頭)と少(-) (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発生圃場率 61.5%(平年 45.4%)と多、新葉寄生率 23.4%(平年 8.3%)と多、寄生頭数 0.73頭/葉(平年 0.51頭/葉)とやや多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並～やや多(概してやや多) (+)</p> <p>考察: 現状の発生量はやや多と思われ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	チャノキイロアザミウマ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃黄色粘着トラップ(6月上旬)では、誘殺数0.26頭/日(平年0.40頭/日)と少 (-)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬)では、100果当り寄生虫数0頭(平年1.2頭。ただし、うち6か年は0頭)と平年並 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、被害果率3.7%(7年平均0.1%)と多の傾向 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察： 県予察圃および一般圃場の発生状況を重視して、現状の発生量は平年並と思われ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	黒星病	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、気温は低くなく(-)、降水量は少なくない(+) 予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発病葉率7.6%(平年0.8%)と多 (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察： 現状の発生量はやや多と思われ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
ナシ	ハダニ類	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、気温は低くなく(+)、降水量は少なくない(-) 予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、寄生葉率0%(平年1.1%。ただし、うち7か年は0%)と平年並、寄生頭数0頭/葉(平年0.05頭/葉)と平年並 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察： 現状の発生量は平年並に少と思われ、大きな増加の要因はなく、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	べと病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、気温は低くなく(-)、降水量は少なくない(+) 予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発病葉率0%(平年0.1%)と平年並 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察： 現状の発生量は平年並と思われ、大きな増加の要因はなく、予想発生量は平年並と考えます。</p>
ブドウ				

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
果樹共通	カメムシ類	-	多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(御浜町:6月1日~10日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 882 頭(平年 428 頭)と多、ツヤアオカメムシ 111 頭(平年 83 頭)とやや多 (+)</p> <p>2) 予察灯(畑・松阪市:6月1日~15日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 255 頭(平年 228 頭)と平年並(±)、ツヤアオカメムシ 93 頭(平年 55 頭)と多(+)、クサギカメムシ 2 頭(平年 2 頭)と平年並(±) (+)</p> <p>3) フェロモントラップ(5月25日~6月8日)では、チャバネアオカメムシ誘殺数は、山地(津市白山町川口)で 106 頭(平年 139 頭)、中間地(津市白山町二本木)で 308 頭(平年 272 頭)、平地地(松阪市嬉野川北町)で 54 頭(平年 55 頭)といずれも平年並(±)</p> <p>4) 巡回調査圃場(6月第2週、カンキツ圃場)では、叩き落とし虫数 0.1 頭(平年 0.1 頭)と平年並(±)</p> <p>5) 一般圃場では、発生量はやや多(+)</p> <p>考察: 現状の発生量はやや多と思われるが、今後圃場への飛来が増加すると予想され、予想発生量は多と考えます。</p>
	炭疽病	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、気温は低くなく、降水量は少ない予想(+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、新葉発病葉数 0 枚(平年 0.4 枚/m²)と少、感染源となる旧葉で発病を確認(発病葉数 4.9 枚/m²) (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は多(+)</p> <p>考察: 現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
	カンザワハダニ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、気温は低くなく、降水量は少ない予想(±)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬)では、寄生葉率 5.0%(平年 4.1%)と平年並、寄生頭数 0.05 頭/枚(平年 0.25 頭/枚)とやや少(-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、新葉寄生率 0.5%(平年 4.8%)と少、寄生頭数 0.01 頭/枚(平年 0.71 頭/枚)と少(-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや多(+)</p> <p>考察: 県予察圃および巡回調査圃場の状況を重視して、現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>
	チャノホソガ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃フェロモントラップ(5月第4半旬~6月第3半旬)では、誘殺数 2451 頭(平年 4381 頭)と少(-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、巻葉数 0 枚/m²(平年 0.7 枚/m²)と少(-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや少(-)</p> <p>考察: 一般圃場の状況を考慮して、現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	チャノミドリヒメ ヨコバイ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、気温は低くなく、降水量は少くない予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、たたき落とし虫数2.7頭(平年1.3頭)と多 (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察： 現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
	チャノキイロアザ ミウマ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃吸引粘着トラップ(5月第2半旬~6月第2半旬)では、捕殺数2387頭(平年2871頭)とやや少 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、たたき落とし虫数24.3頭(平年12.7頭)と多 (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察： 現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
	クワシロカイガラムシ	平年並	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、気温は低くなく、降水量は少くない予想 (±)</p> <p>2) 有効積算温度による発生活長予測式では、第2世代幼虫孵化最盛日は、7月18日(平年7月16日)の予想 (発生時期±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、雄繭寄生株率1.6%(平年12.5%)と少、雌成虫寄生株率14.4%(9年平均5.9%)と多の傾向 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察： 発生活長予測式から、第2世代幼虫の発生時期は平年並と考えます。現状の発生量は平年並と考えられ、大きな増減の要因はなく、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノコカクモン ハマキ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃フェロモントラップ(4月第4半旬~5月第3半旬)では、誘殺数704頭(平年565頭)とやや多 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、ハマキムシ類の巻葉数0.1枚/m²(平年0.4枚/m²)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察： 現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
イチゴ	うどんこ病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、気温は低くなく(-)、降水量は少くない(+)予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発病株率15.5%(8年平均10.9%)と多の傾向 (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少~やや多(概して平年並) (±)</p> <p>考察： 現状の発生量は平年並と思われ、大きな増加要因がないため、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イチゴ	炭疽病	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、気温は低くなく、降水量は少なくない予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発病株率0%(平年0.02%)と平年並に少 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(2011年11月第2週)では、発病株率1.8%(平年0.2%)と多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並であるが、一部で発病を確認 (+)</p> <p>考察： 現状の発生量は平年並と思われますが、昨年状況と今後の気象要因を考慮して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	ハダニ類	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、気温は低くなく(+)、降水量は少なくない(-)予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、寄生株率4.2%(8年平均7.4%)、寄生度1.1(7年平均3.0)と少の傾向 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少～平年並(概して平年並) (±)</p> <p>考察： 一般圃場の状況を重視して、現状の発生量は平年並と思われ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
ネギ	ネギコガ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月15日発表)によると、気温は低くなく(+)、降水量は少なくない(-)予想 (±)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(5月第3半旬～6月第2半旬)では、誘殺数は383頭(平年166.1頭)と多(+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、被害葉率0%(平年0.3%)と平年並に少 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生は認められず平年並に少 (±)</p> <p>考察： 現状の発生量は平年並に少と思われ、大きな増加要因がないため、予想発生量は平年並と考えます。</p>

4. 予察項目の見方

1) 「作物別の状況」の見方

発生時期（平年比）： 平年の発生月日からの差を「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階評価で予測します。ただし、発生時期が毎年大きく変化する病害虫では、日数の基準が下記より大きくなります。発生時期を予察する意義の小さい病害虫では予察しません。

日数		-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	1	2	3	4	5	6	
評価		早	やや早		平年並				やや遅			遅			

発生量（平年比）： 発生密度の平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

		平年値 ↓				
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少	やや少	平年並		やや多	多

発生量（程度）： 発生程度を「小、中、大、甚」の4段階評価で予測します。評価の基準値は病害虫毎に異なりますが、大雑把には、「見た目の多さ・少なさ」です。甚になるほど見た目は多くなり、小になるほど見た目は少なくなります。「発生量（平年比）」と比べることによって、「平年並に発生程度が小さい」「発生程度は大きい平年並の発生量である」「平年より多いが、発生程度は小さい」「平年よ

りやや少ないが、依然として発生程度は中くらいである」等のように判断してください。

小	中	大	甚
---	---	---	---

要防除圃場率（平年比）： 防除の必要性の目安を「低、普通、高」の3段階評価で予測します。「普通」であれば、県下の大半の圃場では防除暦に沿った通常の防除をしていれればよいと予想されます。「高」であれば、防除時期の見直しや追加防除などが必要な圃場の割合が相当増加すると予想されます。「低」であれば、防除回数を減らせるか防除しなくても済むような圃場の割合が相当増加すると予想されます。

低	普通	高
---	----	---

発生消長の一例： 発生予報は向こう1か月の予報ですが、その前後を合わせて40日ほどの病害虫の発生消長の一例をグラフで示します。大まかな目安として利用してください。

防除の注意事項： 向こう1か月の病害虫の特性と防除に関する説明です。

2) 「発生時期・発生量（平年日）の予察根拠」の見方

（±）：平年並の要因

（+）：発生量増加または発生時期遅延の要因

（-）：発生量減少または発生時期早期化の要因

5. 今月のトピックス 「ブドウべと病について」

◆被害の様子と本病の特徴◆

本病は重要病害のひとつで、主に葉、花穂（果房）に発生します。三重県では5～10月頃まで発生します。

葉では、淡黄～黄色の病斑が現れ、やがて葉裏に白色のカビが生えます（写真1）。罹病した若葉や激しく発病した成葉は早期落葉します。



写真1. 若葉の病徴(左:葉表、右:葉裏)

花穂では、発生が早い年には開花前から発病し、ごく幼果期に発病すると肥大が停止し、表面に白色のカビを生じます（写真2）。果実径が2cm程度になるとカビの発生は見られず、灰白～淡黄色の日焼け症状になります。



写真2. 果実の病徴

病原菌は主に落葉の病斑組織内で越冬し、伝染源となります。また、落葉が腐敗した後も土中で2年は生存します。病原菌は風で飛散し、わずかの水分があれば感染するので、一旦発生すると短

期間で被害が広がります。また、品種による耐病性の差が明らかで、デラウェアは強く、マスカット系などの欧州種は弱く、巨峰や安芸クイーンはその中間です。

◆発生しやすい条件と本年の状況◆

本病は22～24℃の多湿条件で発生しやすく、梅雨時期がもっとも盛んに感染が繰り返されます。昨年は梅雨入りが早く、梅雨明け後も降雨が多かったため、8月以降多発しました（図）。本年は越冬した伝染源が多いと考えられます。昨年多発した圃場では、梅雨時期以降の発生に注意してください。

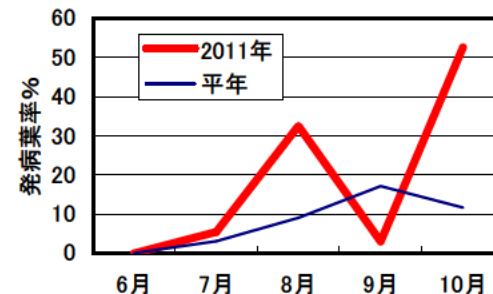


図. 巡回調査圃場におけるブドウべと病発病率の推移
8圃場、各圃場50葉調査の平均。各月上旬に調査。
平年値は過去10年(2001～2010年)の平均。

◆防除のポイントと注意事項◆

- 1) 圃場衛生：主に被害葉の組織内で越冬して伝染源となります。落葉は園外に持ち出して適切に処分してください。
- 2) 栽培管理：柔らかい組織が感染しやすいので、窒素質肥料の多用を避けたり、排水を良くしたりして、軟弱な生育をさせないようにしましょう。
- 3) 薬剤防除：防除時期は5月～10月の長期間にわたります。予防散布に重点をおき、葉裏に十分薬液が付着するよう、ていねいに散布してください。幼果期～袋かけ前は果粉の溶脱、果面の汚れ等の薬害に注意が必要です。

(写真提供：農業研究所伊賀農業研究室 後藤雅之氏)

6. 気象のデータ

東海地方 1 か月予報 (平成 24 年 6 月 15 日 名古屋地方気象台発表)

東海地方の向こう 1 か月は、低気圧や梅雨前線の影響で、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。1 週目は梅雨前線の活動が活発となり、平年に比べ曇りや雨の日が多い見込みです。

1 週目 6 月 16 日～ 22 日	梅雨前線や湿った気流の影響で雲が広がりやすく、雨の降る日が多いでしょう。	津の降水日数・晴れ日数の平年値 3.2 日・2.7 日
2 週目 6 月 23 日～ 29 日	低気圧や梅雨前線の影響で、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。	同 3.2 日・2.4 日
3～4 週目 6 月 30 日～ 7 月 13 日	低気圧や梅雨前線の影響で、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。	同 5.6 日・5.6 日

東海地方週間天気予報 (平成 24 年 6 月 20 日 10 時 35 分 名古屋地方気象台発表)

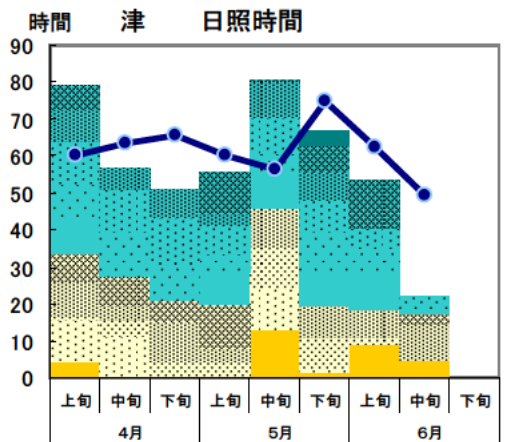
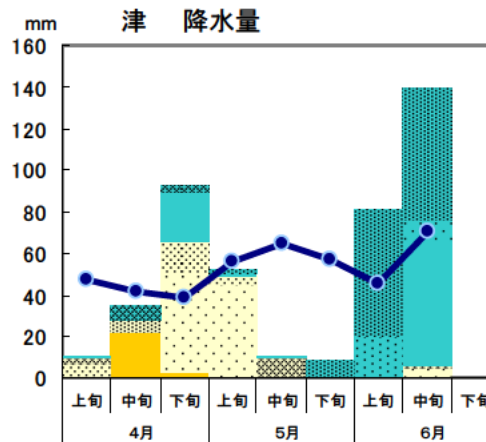
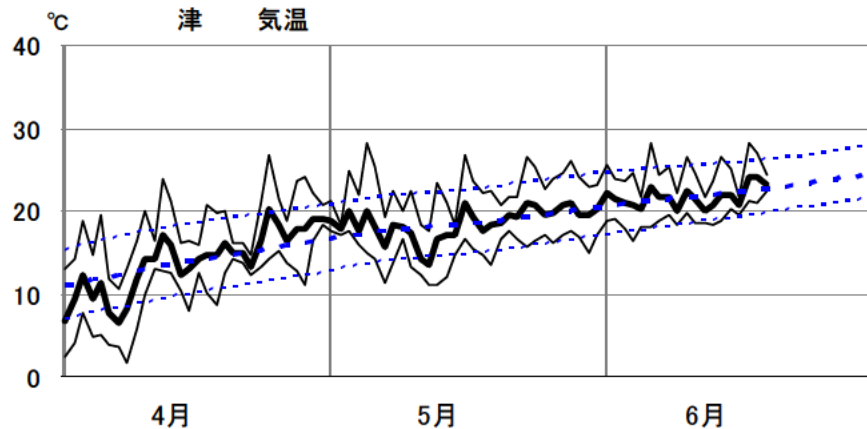
予報期間 6 月 21 日～6 月 27 日

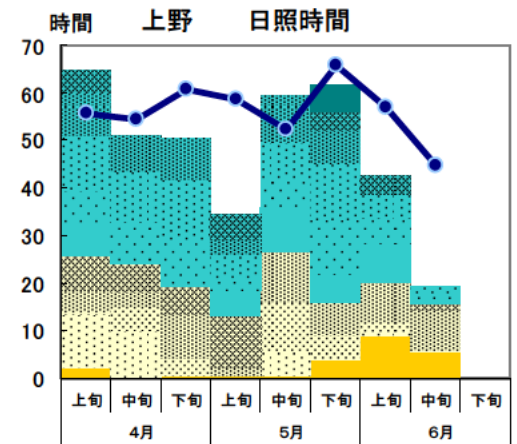
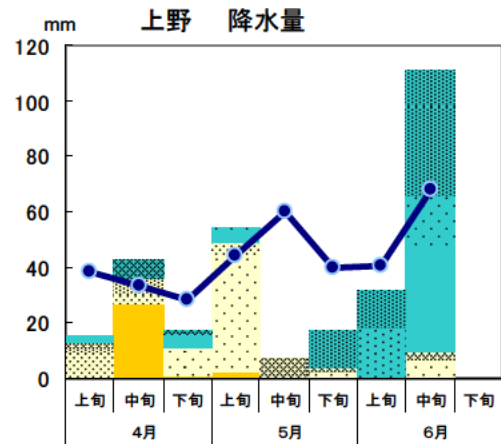
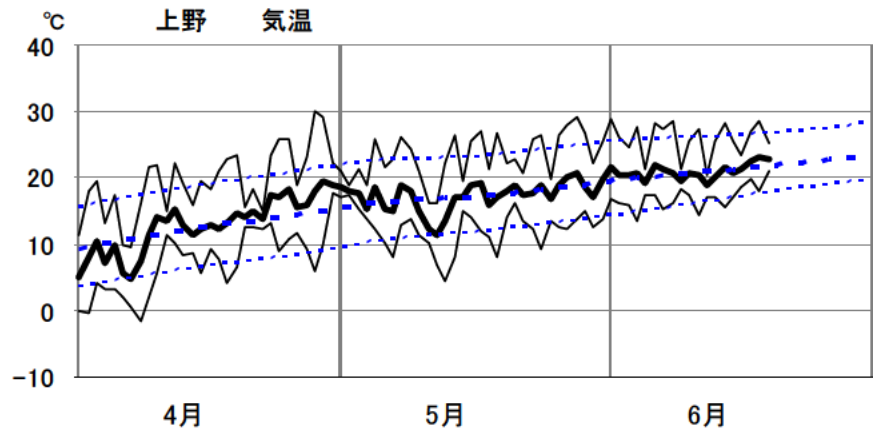
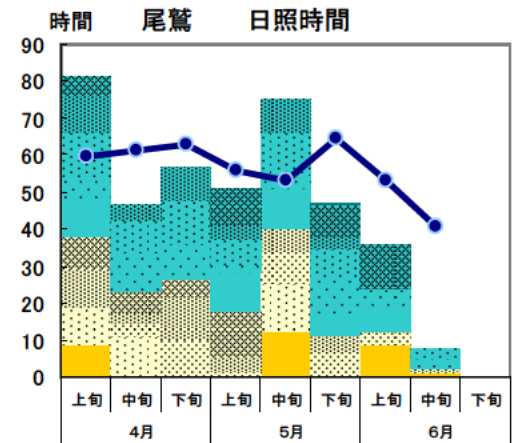
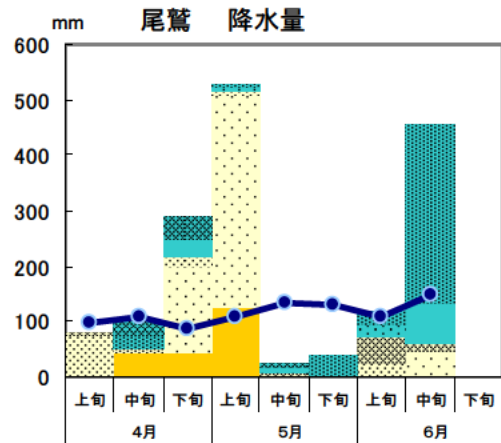
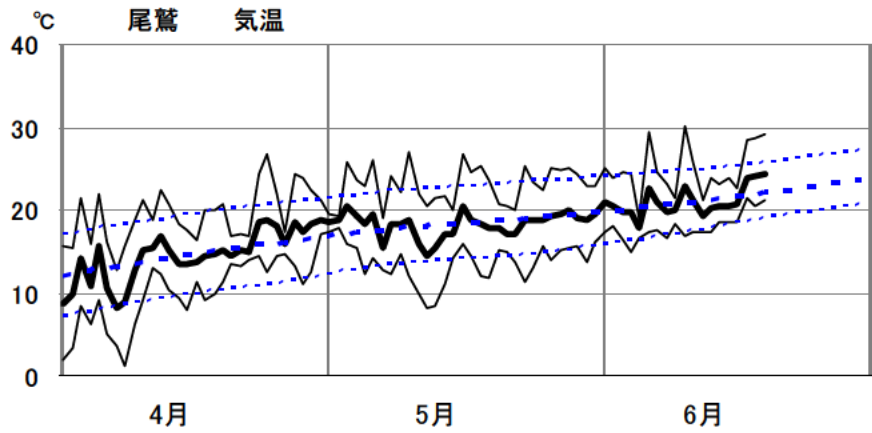
向こう一週間は、梅雨前線や湿った気流の影響で雲が広がりやすく、期間のはじめは雨の降る日があるでしょう。

最高気温と最低気温はともに、概ね平年並でしょう。

降水量は、平年並の見込みです。

気象の日別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> から作成) (6 月 19 日まで)





凡例

- 平均
- 最高
- 最低
- - - 年平均
- - - 年最高
- - - 年最低

凡例

- 31日
- 旬10日目
- 旬9日目
- 旬8日目
- 旬7日目
- 旬6日目
- 旬5日目
- 旬4日目
- 旬3日目
- 旬2日目
- 旬1日目
- 旬平均値

凡例

- 31日
- 旬10日目
- 旬9日目
- 旬8日目
- 旬7日目
- 旬6日目
- 旬5日目
- 旬4日目
- 旬3日目
- 旬2日目
- 旬1日目
- 旬平均値

7. おしらせ (前回と異なる項目には **NEW** の印があります)

1) 記載基準の注意点

平年ほとんど発生のないか非常に少ない病害虫については、平年並に少ない発生状態の「発生量平年比」を「平年並」、「発生量程度」を「小」と記述しています。

2) 発表日 **NEW**

本年度の病害虫発生予報は次の予定で発表します。

- 第1回 4月26日(済み) 第2回 5月24日(済み)
- 第3回 6月21日(今回) 第4回 7月19日(木)
- 第5回 8月23日(木) 第6回 10月18日(木)
- 第7回 3月22日(金)

3) 利用方法

全部または一部をコピーして回覧・配布にご利用ください。ただし必ずページの右下にある「三重県病害虫防除所」の文字が入るようにしてください。

病害虫防除所ホームページには、この予報をはじめとして、不定期に発表される警報、注意報、特殊報、技術情報や、各種のグラフ、写真も載っています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/>

このホームページはフリーリンクです。リンクする場合、事前の承諾申請等は不要ですが、事後で結構ですのでメールにてご一報いただくと幸いです。

4) 本冊子の利用の手引き書

本冊子の見方を説明した「病害虫発生予報利用の手引き」があります。下記のアドレスからお入りください。

http://www.mate.pref.mie.lg.jp/Bojyosyo/files/h24yohotebiki_.pdf

5) メール配信サービス

予報、警報、注意報、特殊報、技術情報が発表されたときに、ホームページに掲載されたという「掲載通知」を電子メールでお知らせしています。このメールの配信を希望される方は、下記のアドレスからお申し込みください。

<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/merumaga.htm>

6) 農薬登録状況の最新情報

農薬の販売や使用に当たっては、農薬登録上の制限があります。農薬の使用時はラベルをよく読んでください。次のインターネットサイトでは、最新の農薬登録状況が確認できます。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報提供システム」

http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm